

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13546

研究課題名（和文）中国明代政治制度の新研究 内閣制度の変遷を中心に

研究課題名（英文）A New Study of the Chinese Ming Dynasty Political System: Focusing on the Transition of the Nei ge System

研究代表者

高橋 亨 (Takahashi, Toru)

東北大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：20712219

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、モンゴル方面に対する明朝の影響力の推移が、明朝中央の政治制度に及ぼした変遷の契機を明らかにすることを究明した。その結果、土木の変に象徴される明朝の軍事的プレゼンスの後退が顕著になったことを契機として、皇帝の冒険的行動を抑制しつつ、安定的な皇位継承を行うための制度の整備が促され、それを担う内閣の職掌が形成されたことを明らかにした。また、ほぼ同時期に、明朝の国家としての自画像を描くために官撰の地理書・歴史書が編纂された経緯を究明した。これらの成果により、北方との関係は、明朝の政体のあり方、さらには国のかたちについて変容を迫る画期をもたらす要因であったことを把握した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明朝については、皇帝権力が極度に増大した時代であり、内閣はそれに付随する秘書的な存在と見なされてきた。しかし、むしろ内閣は、皇帝制度の管理者として新しい職掌を獲得してきたことを明らかにし、従来の明代政体のイメージに再考を促す視角を提示した。また、モンゴル方面との関係の推移が、そのような職掌の確立をうながす引き金となったことを示したことで、明朝の政治制度に変容をもたらした根本的な画期を把握するためには、より広くユーラシア東部の動向に視野を拡張すべきことを提唱できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, We investigated the transition of the influence of the Ming Dynasty toward Mongolia, which caused the transition of the political system in the central part of the Ming Dynasty. As a result, we clarified with the remarkable retreat of the military presence of the Ming Dynasty, which is symbolized by the Tu Mu zhi bian (土木之變), Nei ge (内閣) responsibilities were established to manage the Emperor System. We also analyzed the process of compiling official geography and history books at the same time, and clarified that it was a project to describe the national self-portrait of the Ming Dynasty. Based on these results, we understood that the relationship with Mongolia was a factor that forced the transformation of the political system and the form of the country in the Ming Dynasty.

研究分野：中国史

キーワード：明代 皇帝制度 内閣制度 編纂事業

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した当初、「明代における政体の特質をいかに理解すべきなのか」という問題について、再検討を行う必要があった。我が国で特に影響力を保持してきた学説に、かつて内藤湖南が首唱した「唐宋変革論」があった。唐代から宋代にかけて、「貴族制」から「君主独裁制」に移行するとともに、中国ではあらゆる面で変化が進み、「中世」から「近世」と呼ぶべき時代へ入った、とするこの学説については、国内外の学会で見なおしが進められて久しい。政体について言えば、国内では宋代史研究者によって、当該時期の政治制度の解明が進められつつある。しかし、「君主独裁制」が極まった時代と見なされていた明代については、政治的事件の個別具体的な研究にとどまっていた状態だった。

かかる状況を根本的に打破するためには、皇帝権力に付随して政治的影響力を獲得していたと評価されてきたがゆえに、まさに明代における「君主独裁制」を象徴する制度とされてきた内閣の発展過程について検証を行うことが有益であると着想した。

また本研究開始以前の研究成果により、永楽年間における内閣の臣僚は、外国語文書を執筆できる異民族をも擁する皇帝の秘書集団の中に位置づけられることを把握していた。これは、永楽年間における対外積極策と軌を一にする現象である。したがって、明朝の対外姿勢、就中モンゴル方面との関係の推移を視野にいれることで、中国内部における制度的展開に加え、内閣制度の発展を誘発した要因についてより広範な視座から把握できるとの考えを有していた。

### 2. 研究の目的

本研究では、モンゴル方面に対する明朝の影響力後退が決定的となった土木の変の後に、内閣が獲得した新しい職掌の意義を把握するとともに、それを生じさせた画期が明代全体の歴史の中で占めていた位置を解明することが全体的な目標であった。すでに、正統-景泰期に皇帝に対する進講を行う経筵の制度が確立されていく過程を分析したことで、北京という北方世界との境界の直近に都をかまえた明朝では、皇帝の冒険的行動を制御するための具体的制度が企及された、という時代の潮流をつかんでいた。本研究では、それを踏まえ、そののち皇帝を戴く政体を順当に運営していくために、いかなる制度の整備が進められたのかを究明することが目的となった。

また、明朝という国家のあり方そのものを問う趨勢と、あるべき政体を模索する潮流とは、同時代的な現象であったことを明らかにすることも目指した。それゆえ、土木の変によってモンゴル方面に対する劣勢へと転じたとき、明朝ではいかなる認識のもとで、その国のかたちを定義するようになったのかを把握することも試みた。

### 3. 研究の方法

はじめ、明朝とモンゴル方面とが対峙する状況に、また新たな局面が生じる嘉靖年間以降の情勢を視野に入れて研究を進める構想を有していた。しかし、まずは内閣制度の前身とされる洪武年間の施策について明確な評価を導き出さなければ、それ以後の制度変遷を理解するうえでの土台を得られないことに気づいた。それゆえ、永楽以降に内閣の臣僚を輩出していく翰林院の構成員・機構について、洪武から天順にかけての変遷を跡づけることを優先した。

そのため、第一に当該時期の文集史料を網羅的に精査し、そこに収められた各種文章や上奏文より、各時期に翰林院にあった人間がいかなるキャリアを歩んでいたのかを分析した。そうすることで、それらの人材が負うべき役割がいかに形成され、そして変化していったのかを把握することに注力した。

加えて、上記の方法で把握できた変化の根本的な背景として、明朝という国家のあり方に関する構想の変遷をとらえようとした。そのためには、明朝中央の視座から、明朝という国家に対する認識を総体的に把握することが、まず必要な作業であると判断した。それゆえ、官撰の地理書・歴史書の叙述を分析することが有効と考えるに至ったので、それら史料群の精読を優先して進めた。

### 4. 研究成果

#### (1) 土木の変の後ににおける内閣臣僚と皇帝制度との関係の解明

上述のように、土木の変によって、明朝の臣僚たちが皇帝の言動を制御するための便法として経筵制度の整備を進めたことを明らかにしていた。この土木の変の余波で、突発的に即位した景泰帝が英宗の子を皇太子から廃し、自分の子を皇太子としていた。しかし、その子が薨じると、景泰帝は皇太子を立てないという挙に出る。そこで、臣僚たちは、景泰帝が皇帝として果たすべきつとめを為していないと見なし、相次いで批判を行う。結局、景泰帝が病にたおれ、英宗が復辟するが、おそらくは景泰期の状況を反省した結果として、皇太子を順当に育成するための制度が整備された。そして、皇太子育成の管掌は、すでに皇帝の教導(経筵)の実施を職掌としていた内閣に帰した。ここに内閣は皇帝の再生産に関わる職務をも負うようになったわけだが、土木の変を具体的なきっかけとして、皇帝制度を順当に機能させるための制度の整備が一挙に進んだことになる。これらの職掌は明代末期まで内閣のもとにあったことが確認できるため、内閣は皇帝制度の管理者としての地位を保持し続けと評価できる。この研究結果については〔雑誌論文〕で公表したが、「研究開始当初の背景」で述べた、明代ひいては宋代以後の政体の特徴を皇帝権力の増大に見出す見解は一面的な者に過ぎず、その修正を迫り得る視角を提示したこと

になる。

また、このような見解を提示する前提として、再生産されるべき皇帝は当時の政体においていかなる役割を担わされていたのかを明確にする必要があった。それが朝儀における聖旨(皇帝の御言葉)を下す作業だったことは、本研究以前にある程度把握していたが、あらためて行政案件の処理過程を窺える文書を多く収める『皇明條法事類纂』を用いて、成化年間における聖旨拝受のプロセスを把握した。その結果、皇帝といえども具体的な「しごと」を負った存在であり、臣僚たちも皇帝がそれを果たすよう要求していたことを明示できる成果を得た。この成果については、〔学会発表〕で公表し、現地の研究者からも好評を得た。なお、これによって、「中国に君臨していた皇帝とは何者か？」という大命題についても、明代史から一つの新しい視角を発信できる。

なお、ここまでの研究成果を踏まえ、内閣制度の再検討から明代政体研究について新たな視角を獲得する意義を〔学会発表〕で提唱してきた。

### (2) 土木の変による国家認識の再編の分析

(1)で述べたように、土木の変は明朝臣僚たちにあるべき政体を保つための制度構築を促したが、それが総体的にはいかにどの衝撃をもたらした事件だったのかを把握しようと試みた。それによって、内閣の新たな職掌の形成も、同じ画期によってもたらされた事象と位置づけることが可能となる。そこで、景泰・天順と断続的進められ、『大明一統志』として結実した地理書編纂の過程を分析するとともに、景泰に始まり成化に完成した歴史書『統資治通鑑綱目』と洪武に編纂された『元史』の叙述を比較検討した。これら地理書・歴史書を精読した結果、土木の変によって北方への影響力を保持できなくなった明朝は、その版図を明示してその保全を謳うとともに、中華のみの統一を自己正統化の論理として強調するようになったことを見出した。すなわち、土木の変によって、はじめて明朝の正統性の在り処を明確にすることが求められたのである。かかる視座から見れば、土木の変は明朝の国家としての在り方そのものに再考を迫った事件であったと見なせる。したがって、「明朝とはいかなる国家であったのか？」という問題を考察する際に、北方との関係の推移を踏まえて画期を見出すことが有効な視座となることをも提唱できる。この成果については、〔学会発表〕で公表し、おおむね好評を得たので、現在のところ改めて考察すべき点を調査したうえで、論文化を進めている。

### (3) 洪武における「内閣制度前身」の考察

「研究の目的」でも述べたが、まずは内閣制度の濫觴と見なされてきた洪武期の諸政策について、その性質を把握することが研究の土台となると判断した。具体的に言えば、皇帝の顧問役として任用されたと見なされてきた四輔官・殿閣大学士、そして翰林院の官員に期待された役割の分析が急務であった。そこで、当該時期の各種史料を網羅的に調査した結果、彼らは皇帝の顧問を受けると同時に、皇太子の補佐役としてののはたらきを期待されており、洪武年間に断続的に行われた東宮官の確保という流れの中に位置づけ得ることを見出した。そこから、皇太子・諸王の役割の把握に踏み込んだが、結果的に皇太子を南京に据え置き、順次皇太子に政務処理を移管するとともに、諸王を辺境地域はじめ各地に分封して国家の防衛を担わせていくという、朱元璋の構想を窺えた。こういった構想については、従来の研究でも指摘されていたが、本研究ではその中に上述の人材の任用を位置づけられることを明確化した。そして、それは「研究開始当初の背景」で述べた異民族を擁する秘書集団の中に位置づけられる永楽期の内閣臣僚とは、任用の背景が全く異なる。それこそは南京を中心として次代の政権の在り方を模索した洪武と、北京に都を置き対外積極策に打って出た永楽の差異である。このような見解に達したことで、皇帝に近侍した臣僚たちの性質を根底で規定していたのは、対外政策を含む国家構想のあり様であった、という視角を明初に遡って適用し得ることを提示できる。この成果については、〔学会発表〕で公表したが、さらに考察を深めるべき点があることに気づいたため、目下その解消を図るとともに論文化する準備を進めている。

〔雑誌論文〕

高橋亨「明代天順年間における皇太子教導制度の確立」(『東洋學報』第100巻第1号東洋文庫 pp.69-97、2018年)

〔学会発表〕

高橋亨「明代正統 天順年間内閣官職掌的形成」(南開大学歴史学院講座 2019年12月 中華人民共和国 南開大学 歴史学院 天挺閣)

高橋亨「洪武 - 永楽の間の人材育成・登用策について 洪武期の施策を中心として」  
(2018年度東北史学会 2018年10月 弘前大学)

高橋亨「明代中期における朝儀空間の研究」(2018 台日明清研究交流合宿 2018年8月 台湾中央研究院近代史研究所 档案館 第一会議室)

高橋亨「『大明一統志』『続資治通鑑綱目』の編纂について」(2017年度東北史学会 2017年10月 東北大学)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋亨	4. 巻 100 1
2. 論文標題 明代天順年間における皇太子教導体制の確立	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋学報	6. 最初と最後の頁 69 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋亨
2. 発表標題 明代中期における朝儀空間の研究
3. 学会等名 2018台日明清史研究交流合宿
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋亨
2. 発表標題 洪武 永樂の間の人材育成・登用策について ―洪武期の施策を中心として
3. 学会等名 2018年度 東北史学会 東洋史部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋亨
2. 発表標題 『大明一統志』『續資治通鑑綱目』の編纂について
3. 学会等名 2017年度東北史学会東洋史部会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高橋亨
2. 発表標題 明代正統 天順年間内閣官職掌の形成
3. 学会等名 南開大学歴史学院講座
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----